

## 関西方言の文末表現について

### -個人言語と年齢アイデンティティーとの関連-

村 中 淑 子

#### 1 はじめに

筆者らは、2006・2007・2008年に、「ことばの加齢変化」をテーマとして、いくつかの調査を行なった（後に付記した通り、科研による調査である）。その中に、関西において行なった一連のインタビュー調査がある。本稿では、その関西インタビュー調査から得られたデータを材料に、個人の使用言語と言語意識との関係について、ごく簡潔な素描を行なう。

ことばの加齢変化とは、個人の中で、年齢が上がるとともに言葉遣いに変化することで、主として成人期以降のことばの変化を指している。

インタビュー調査は、加齢に伴って使用が開始される言語形式があるかどうかを話者に内省してもらい、というかたちで行なった。2006年から2008年にかけて、約40名の関西方言話者（20代前半から50代前半の男女）に、約1時間30分ずつインタビューを行なった。多くの場合、2名一組の話者（同性の親しい友人もしくは夫婦）に同時にインタビューした。これは話者の内省を促進するためである。予想語形について調査者が積極的に問うこともしたが、全体としては自由談話形式で行ない、自発的な内省報告を重視した。（調査についての詳細は、科研報告書に記載）。

#### 2 中年イメージの語形と方言使用

たとえばある話者は次のような内省を述べた。

ワカリマスワとかソーデスワとかは、職場の年上の同僚と関西弁で話すときに使う。28歳くらいから使い始めたと思う。自分で使ってショックだった。我ながらおばさんぽいと感じて嫌だが、つい言ってしまう。他に言い方

が無い。そうでないと標準語になってしまう。(36歳女性教員、2006年当時)

この内省からどのような解釈が引き出せるだろうか。

まず言えるのは、中年イメージの付随した語形が存在する、ということである。この話者は「おばさんぽい」という表現を使っているが、同様の意見が多数得られた。そして、この中年イメージの伴う語形群については、おとなになって初めて知り覚えたものではなく、子供のころから聞き知っていたものであると思われる。この例でいえば、ワカリマスワやソーデスワという形は、28歳よりもずっと以前から知っているものであったろう。つまり、長らく理解語彙であったものが、30歳近くになって使用語彙へと移行したのである。中年イメージのある語形、いわば中年向けの既製品を、自分が中年に近くなって利用し始めた、ということである。

もうひとつ言えるのは、標準語でなくどうしても方言で話したい場面、というものが存在する、ということである。上記の例では、おばさんイメージというマイナス面を引き受けてでも、標準語使用を避けて、関西方言形を選択しているわけである。しかも、「年上の同僚と方言で話したい」ことに注目したい。同僚は、職場という公的な場面で会う存在である。プライベートの友人ではないことが多いだろう。しかも年上であれば、丁寧に待遇することが要求される。しかし、頻繁に会う相手であるから、ある程度の親しさは必然的に生じている。そのような、「丁寧さ」と「親しみ」とを同時に表したい相手に対して、方言で話す強力なニーズがある、ということである。

### 3 関西方言における大人のスタイル2種

インタビュー調査の結果、関西方言における大人のスタイルが、少なくとも2種類あるという仮説を得た。

ひとつは「関西方言話者の大人が日常的ツールとして使うスタイル」である。たとえば「デス・マス+方言の文末表現」がそれである。具体的な語形としては、デスワ・マスワ、デスヤン・マスヤン、デスネン・マスネン、デスノン・マスノンが男女共用であり、デスナー・マスナーとデスワネ・マスワネは中年男性語のようであった(末部の表1に、参考資料として、東京方言における類似の形式とともに、音調の印付きで一覧を示した)。ほかには、「ーハル?」のような「デスマス抜きだが丁寧な質問形」などもこのスタイルに含まれると考えている。

もうひとつは「関西方言話者の大人が非日常的ツールとして使うスタイル」

である。たとえば「デス・マス+方言の文末表現」でデス・マスが音声的に訛った形、がそれである。具体的な語形としては、デンナー・マンナー、デッシャロ・マッシャロ、デンネン・マンネン、マヘン、マヒョ、デッカ・マッカ、デンガナ・マンガナ、デッセ・マッセなどがある（末部の表2に、音調の印とともに、一覧を示した）。これらは、話者の内省によると、上記の日常的ツールの語形群とは、ハッキリ区別されているようであった。また、これらをさすのに、「大阪弁の強烈バージョン」「でんがな・まんがなトーク」「濃い大阪弁」「ベタな喋り方」「いわゆるコテコテ」といったことばが話者によって使われており、話者にもこれらが1つのグループをなす語形群として意識されていることが伺えた。このスタイルは、場の雰囲気を楽しくしたい、コミュニケーションを円滑に進めたい、などの目的で戦略的に使用されるものである。中年男性が道具として使いこなしていることが多いのだが、女性や若い世代でも使うことがある。中年以上でより習熟してくるものと思われた。関西方言話者全般にとっての潜在的なレパートリーであるが、加齢に伴って使いこなしが促進されるものと思われる。ほかには、オーキニなどもこのスタイルに含まれる。

#### 4 大人のスタイルを用いる要因としての話し相手と場面について

今回、ことばの加齢変化を調べるためのインタビューを通して、大人になつて使い始める語形の洗い出しを行なった。それらの語形を使う相手・場面として多くの話者が挙げていたのは、「職場の同僚」「親しい取引先・得意客」「子どもの保護者仲間」「消防団などの地元の付き合い」「大人になってからの親戚付き合い」「店の人やタクシードライバーなどと話す時」であった。

これらは通常、こどものときには存在していない、大人になってから新たに生じた人間関係である。大人だからこそ必要になる付き合い関係である。そのような人間関係が、大人ならではの言葉遣いのニーズを生じさせる要因であると考えられた。

では、これらの相手・場面から抽出できる要素は何だろうか。

二つの要素が抽出できると考える。

ひとつは、「親しみと同時に丁寧さも必要とされる人間関係」（仮にAと呼ぶ）である。もうひとつは、「親しくなく、気のおける相手との、くつろいだ雰囲気作りの必要性」（仮にBと呼ぶ）である。

AとBは、「縮められない距離がありながらなおかつ距離を縮めようとする人間関係がある」というふうにまとめてしまうことも可能である。具体的人

物に即して考えると、「職場の同僚」や「取引先・得意客」であれば、人によってAであったりBであったりするだろう。

しかし、AとBは区別して考えたほうがよいように思われる。Aは、いわゆる「親しい目上」である。「親しい目上」というのは、待遇表現調査などにおける話し相手設定の文言としてもしばしば使われてきたものである。それに対して、後者のBは、決して親しくない目上とも限らないのである。典型的なのはタクシードライバーとの関係である。ここで、インタビューで得られた話者の内省を紹介しよう。

たとえば、子どもと奥さんと3人でタクシーに載ったときに、しーんとするのはなく、会話を無理にでも続けようとする。家族でどこかへ行くときに、タクシーに乗った時、なごやかな雰囲気を出すために、「そうですねあ」とか「今日はよう雨降りましたなあ」とか、そんな会話をしているような気もする。(47歳男性教員、2008年当時)

相手とは親しくないのだが、その場の雰囲気を良くしたいという意図なのである。つまり、Aは相手との人間関係に重きが置かれてことば使いが選択される、話し相手志向の要因なのだが、Bは相手ではなく場の雰囲気志向の要因なのである。

## 5 なぜ「デス・マス+方言文末詞」の形なのか

ことばの加齢変化に関するインタビュー調査を行なって、大人のことばとして得られた語形には、3で挙げたように、デス・マスと方言の文末表現の組み合わせが多くみられた。これは決して偶然のことではないと思われる。

すなわち、4でみたように、大人のスタイルを用いる要因には、「親しみと同時に丁寧さも必要とされる関係」という話し相手志向のものと、「親しくなく、気のおける相手との、くつろいだ雰囲気作りの必要性」という場面志向のものがある。

前者の場合については、相手への丁寧さを表すためのデス・マスと、親しみを表すための方言文末詞の組み合わせることになる。

後者の場合については、親しくない距離を表すためのデス・マスと、くつろいだ雰囲気作りのための方言文末詞を組み合わせることになるわけである。

## 6 おわりに

次のようにまとめることができる。

大人になってから新たに生じた人間関係があり、それが要因となって、大人スタイルの言語形式の使用が開始される。その要因は2つに分けることができる。「親しみと同時に丁寧さも必要とされる」という話し相手志向と、「親しくなく、気のおける相手との、くつろいだ雰囲気作りの必要性」という場面志向とである。

「デスマス+方言の文末詞」という語形は、この2つの志向のいずれも、それぞれに満たすことのできるものである。

大人スタイルには少なくとも2種類のものが見いだされた。日常的ツールとしての大人スタイルと、非日常的ツールとしての大人スタイルである。いずれも、潜在的レパートリーとして子供のころから内在していたと考えられるのだが、前者は中年に近い年齢になって普通に使われるようになり、後者は、中年に近い年齢になって使いこなしが促進されるようになる。

またこの2種のスタイルは、ニュアンスの違いはあるが、いずれも中年イメージを伴う関西方言の語形である。話し相手もしくは場面によって必要性が生じた場合、中年の（あるいは中年に近づいた年齢層の）話者は、その語形を使わざるを得なくなる。2で紹介した話者は、「お婆さんぼくて嫌だが使う」と内省していたが、他のある話者は、「昔はお婆さん臭いと思っていたが、

（中年になった）今は自ら進んで使っている」と述べた。このように、消極的か積極的にかかわらず、自分自身を中年か中年に近い存在であるとしてとらえた時点で、使用が開始される。年齢アイデンティティーによって、個人の言語が変化するわけである。

じつは、女性話者のみに限定すると、日常的な大人スタイルの言語形式に含まれるものとして、必ずしも中年イメージとは関わりのないものも見いだされた。東京語の女性語（文末のカシラなど）の使用開始と、ネオ方言形（文末のヤヨなど）の使用開始とである。これらについては、使用開始の要因も、上記に述べたものとはまた別のことがらが考えられた。これらをも含めた、関西方言話者の大人のもちいる言語形式の全体的なシステムについては、稿をあらためて詳しく論じることとしたい。

付記 本研究は、文部科学省科学研究費補助金「加齢による社会活動の変化にともなう言語使用の変化に関する研究」(平成18年度～平成20年度、萌芽研究、課題番号18652045、研究代表者：尾崎喜光)によるものである。調査にご協力くださった皆様方に深く感謝致します。

#### 参考文献

- 井上史雄.(2007). 新方言・若者語・世代語の性格. 社会言語科学会第19回大会発表論文集, 350-357.
- 大鐘秀峰.(2007). 加齢による言葉の変化について①. 北海道方言研究会会報, 83, 19-24.
- 尾崎喜光(1999)「好きなんですなあ, おじさん言葉」第12回「すつきやねん若者ことばの会」発表資料,  
(<http://ha8.seikyou.ne.jp/home/wexford/12MrOzaki.htm>).
- 尾崎喜光(2001)「日本語の世代差はなくなるか」『月刊言語』30-1, 66-72.
- 尾崎喜光(2005a)「年齢と言葉」『文化庁月報』2005年7月号, 29.
- 尾崎喜光(2005b)「女のことば・男のことば」上野智子他(編)『ケーススタディ 日本語のバラエティ』(pp.6-11) おうふう
- 尾崎喜光(2007)「くらしの中の日本語」よくしたー「ねぎらい」の言葉ー  
信濃毎日新聞, 2007年7月12日.
- 尾崎喜光・村中淑子・大鐘秀峰(2007)「言葉の加齢変化はどこに見られるか?」  
社会言語科学会第20回大会発表論文集
- 国立国語研究所(2003)『学校の中の敬語2—面接調査編—』三省堂
- 国立国語研究所編(尾崎喜光)(2000)「[問16]「雨ですね」に比べて, 「雨ですな」は……」『新「ことば」シリーズ12 言葉に関する問答集—言葉の使い分け—』38-39. 国立印刷局
- 渋谷勝己(2008)「スタイルの使い分けとコミュニケーション」『月刊言語』37-1
- 田原広史・村中淑子(2002)『東大阪市における方言の世代差の実態に関する調査研究2—待遇表現—』平成9・10年度東大阪市地域研究助成金研究成果報告書2、A4判, 155頁
- 村中淑子(2004)「大阪方言におけるデス・マス+文末詞—中高年男性語かどうかの検討—」『静岡・ことばの世界』6, 18-30
- 村中淑子(2006)「オトナが使うことばについて」『静岡・ことばの世界』7, 45-56

表1 「デス・マス+方言の文末表現」の音調

関西方言話者の大人が 日常的ツールとして使うスタイル	東京方言における類似の形式
デス' ワ	●デ(')スワ↑
マス' ワ	●マ(')スワ↑
デス' ノン	●デス(')ノ(↑)
マス' ノン	●マ(')スノ(↑)
デス' ヤン	—
マス' ヤン	—
デス' ネン	—
マス' ネン	—
▲ デス [ ] ナ' ー	—
▲ マス [ ] ナ' ー	—
▲ デス' ワ「ネ」	●デ(')スワ「ネ(')」
▲ マス' ワ「ネ」	●マ(')スワ「ネ(')」

' は直後の拍が低く付くことを表す。

「 は直後の拍が高く付くことを表す。

▲は男性語を表す。

●は女性語を表す。

( ) や [ ] に入っものは、省略可能であることを表す。

—は、左の関西方言形に類似した形式が東京方言に無いことを表す。

表2 「デス・マス+方言の文末表現」でデス・マスが音声的に訛った形とその元の形

後接する 文末表現	デス・マスがそのままの形 でついたもの	デス・マスが音声的に訛った 形
ワ	デス' ワ マス' ワ	— (デッサ・マッサがこれ に当たる可能性あるか)
ナー	デス [「 」 ナ' — マス [「 」 ナ' —	デン [「 」 ナ' — マン [「 」 ナ' —
ヤロ	デス' ヤロ マス' ヤロ	デッ' シャロ マッ' シャロ
ネン	デス' ネン マス' ネン	デン' ネン マン' ネン
ヤン	デス' ヤン マス' ヤン	× (デッシャン・マッシヤ ンの形があるか)
ン	— マセン	— マヘン
意向形 (ウ)	デシヨ マシヨ	— マヒヨ
カ	デスカ マスカ	デッカ マッカ
ガナ	デス' ガナ マス' ガナ	デン' ガナ マン' ガナ
*	* *	デッ' セ マッ' セ

いちばん右の欄が、関西方言話者の大人が「非」日常的ツールとして使うスタイルである。

' は直後の拍が低く付くことを表す。

「 は直後の拍が高く付くことを表す。

[ ] に入れたものは、省略可能であることを表す。

—を入れた箇所は、該当の語形がないもの(デス+否定のン、その音訛形、デシヨの音訛形)。

\*印を入れた箇所は、音訛形の元となる形が明らかでないもの(デッセ・マッセは、デス・マス+文末助詞エの可能性もあるが、音調から考えると異なるのではないか)。